



## 啄木追憶記念會の記

東京にて

高橋一生

啄木去つて廿一年明治四十一年の四月十三日二十才の短かく又苦難の生涯を閉て丁度本日は廿一年忌で有り啄木の晩年の親友であるところの土岐善勝氏が矢張り廿一年ぶりで啄木追憶を改造社より出版されたので啄木の追想會と土岐氏の出版記念會と兼ね東京啄木會で催された。來會者廿九名故人の像を正面に飾り生前の貧しかつた故人の生活を偲ぶにふさわしく總てが簡単な料理だった主なる出席者は啄木の曲及び演奏會をやられる清瀬保三氏啄木の遺兒京子さん夫君右川正雄氏等及啄木會の若い人達が山本改造社長の寄附のビールで春には珍らしい裏さに元氣をつけて話を進める。土岐氏が起らしく啄木追憶の出處就ての挨拶を述べ金田一氏は啄木と北原白秋との話題をしんみりとナマリのある言葉をボツボツと話された。啄木の歌の朗詠に成り「東海の小島の嫁の白砂を」の死後節子夫人の苦しきは土岐氏は土岐氏の啄木の追憶の中から「離音の中」のかくてあればわが今日をしもあるしめしにこじりて笑へ、娘を寄せる事も容易にせず笑ふにも、一寸顔へ擦る事も容れぬがしてはならぬ。

○明王は一朝一笑をいつくしむ……(解説)

時時病があるが啄木によると必ず笑をよするのである、體育心動かしてはならぬ。

前ひそかにわく涙かれ遂にこのひと壺のしるき骨たつたこれだけに

なりけるかも。

いさごがくれらひさき秋のさくらむ、雨のふる日

は乳もほそるか

いさごがくれらひさき秋のさくらむ、雨のふる日

